

〈報告(2)〉

男性介護者のケア・コミュニティ構築 および介護者支援に関するアクション・リサーチ

齋藤真緒

(産業社会学部准教授)

産業社会学部の齋藤です。今、育休中で公の場に出てくるのは1年ぶりです。人間科学研究所が創設された時の初代ポストドクターの研究者として育てていただいたご恩がありますので今日は頑張ってお出まいました。私たちは男性介護者のケア・コミュニティの構築ということで、大学の役割として、オーソドックスに新しい社会のあり方を社会に問題提起をしていく、新しい価値創出をしていくことが基調になると考えています。

人口減少社会の到来の中で家族のあり方が大きな打撃を受けてきて男性介護者が徐々に増加してきています。家族関係も大きく変化し、今までは嫁が家事、育児すべてを担ってきていましたが、そういう時代ではない中で、男性介護者が量的にも増えてきています。さらに介護保険制度が導入されてからも、残念ながら介護殺人とか虐待とか悲しい家族の事件は減っていません。加害者の7割が男性です。男性介護者が、どういう介護をしているのか、どんな実態があるのか、特定の支援が必要だとすれば、それはどういう支援なのか。2005年から調査研究して社会に問題提起をしてきました。これまでの国の統計では介護は女性がするものという前提になっていましたので、介護で困っていることを選択肢の中で「家事」に関する選択項目がもともとありませんでした。高齢になると特に家事ができない男性も少なくありませんので、そういう実態を調べてきました。私たちも当初、男性介護者になかなか直接アクセスすることが難しかったのですが、男性介護者を支える団体を立ち上げようと2009年に男性介護者と支援者の全国ネットワークの創設を立命館大学でさせてもらいました。介護をテーマに北海道から、九州まで150人近い男性が集まってきていただきました。その日は世界女性デーでしたが、男性もこういう問題に大きな関心をもつきっかけになったのではないかと考えております。

男性介護者のネットワークをつくりあげ、会員を増やしてきています。今は47都道府県、会員数が600名まで増えてきました。毎年、総会を開いて男性たちが自分の問題だけではなく、悩んでいる、孤立している男性介護者にメッセージを発するというをやってきています。俳優の長門裕之さん、妻の南田洋子さんの介護で、当時、テレビにも出ておられましたが、そういう方をお呼びしながらメッセージをつくっていく取り組みをしていきました。近い地域に家族介護者の会はあるんですが、女性が主体で男性が入りにくいということで、男性介護者同士が交流できる組織を各地でつくっていかうと呼びかけをしてきました。全国ネットワークを立ち上げた当時は男性介護者支援をする団体は全国で3つしかなかったので全国にもっと広めていかうと取り組みをしていきました。特に高齢の男性で介護している方の場合には自治体の広報は頼みの綱です。細かいところまで読まれていたり、新聞の小さな見出しをしっかり読まれて、そこから情報をえて集いにこられる方も多かったです。また男性が男性自身を励ます意味で、毎年、「男性介護者100万人へのメッセージ」として全国の男性介護者から手記を募集して届ける作業をしています。専門職の方からは、男性介護者の方にケアマネやヘルパーさんが声かけをしても、どんなにしんどいかをすぐには打ち明けてくれない。男性らしさの影響もあるかと思いますが、「あなたが困っていることはあなただけではない」と自分の介護体験を広げていく文字ベースの取り組みもしています。

全国で男性を支える介護の集いが広がっていき、把握している限りでも約50団体あります。既存の団体も男性を基軸とした集いを始めるようになってきました。大学が研究拠点として全国ネットワークを立ち上げるリメットは何か。会の主催者はいろいろです。専門職、支援者が立ち上げる場合、地域包括支援センターが立ち上げる場合など。介護当事者の方が集まりたいということで動き始める場合もありますが、社協がすぐに動いてくれないとか、行政がお金を出してくれない、会場を貸してくれないといった問題に直面することがあります。そういう意味では大学と提携することによって行政とか関係機関と上手な提携がとれるという成果があるのではないかと思います。

男性介護者の会を通じてどんなことをしてきたか。介護体験を自らが語る、他の人の話を聞くプログラムを大切にしてきました。その中で自分の介護体験を相対化できる。介護を仕事のように頑張っていたんだけど、そうじゃない介護の仕方もある。つどいが、ロールチェンジが作用する場にもなっています。

介護保険制度は要介護者のための制度ですので、要介護者の周りにいる家族を支えてくれる仕組みが、制度としてありません。介護家族を支える仕組みが、今後、大事になってくると考えています。

こうしたことをする中で、さらなる問題や研究課題もみえてきています。一つは男性介護者に限らず、家族介護者が多様化してきています。老老介護、認認介護、親と配偶者を同時に介護しないといけない重複介護、遠距離介護、育児と介護が同時に起こるサンドイッチ介護、最近問題になっているといわれているのは単身で親をみているシングル介護者の増加です。30、40、50代で親が倒れる、他方で晩婚化、未婚化の傾向がありますので、その時点で親の介護をしてしまうと、自らの結婚や経済的な自分の足場が不安定になってきます。親の年金頼りで仕事を辞めたり、パートに切り換えたりして働く方がいますが、介護は育児と違って長期化する傾向にあるので、親をみとった後の自分の生活が極めて不安定なものになるということがみえてきています。介護することがその人の生活、人生を不安定にしない、介護者の生活の質（QOL）の保障を、どう考えていくかが、今後の重要な研究課題です。

ここ数年とくに重点的に取り組んでいるのは介護と仕事との両立のテーマです。年間14万人が介護離職をしているという数字があります。企業にとっても大きな損失になっていますので、育児とは違うサービスの提供、働き方の抜本的な見直しが必要になっています。大学の機能として、また私自身の研究課題としてもまだ十分展開できていないことは、社会科学系が、いかに研究のカウンターパートとして企業と連携していくのかという点です。企業と大学とのパートナーシップについて、このパネルディスカッションで議論していきたいと考えています。以上です。